

活動報告書

報告者氏名：山川米子

所属：沖縄県北谷町立北谷中学校

記録日：平成26年 2月26日

【対象児（群）の情報】

- ・ 学年
中学3年生 男子A
- ・ 障害名
知的障害
- ・ 障害と困難の内容
 - ・ 軽度の知的遅れはあるが、身辺自立は確立しており、言葉による指示も理解でき、会話も問題ない。一方で、思い込みで行動してしまうことも多く、情報を取得したり比べたりして判断することには困難が大きい。
 - ・ 読み書きや計算（四則計算）は小学校低学年程度の課題に取り組んでいる。「もっとできるようになりたい」「たくさん漢字が使えるようになりたい」という気持ちを持っているが、集中がとぎれがちで、なかなか課題への継続した取り組みが難しい。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい
 - ・ 機器を活用することで、見通しを持って情報の収集・比較・発信を体験し、卒業後にも使える手だてにつなげていく。
 - ・ 学びやすさや捉えやすさを支えながら学習していくことで、漢字の定着を図る。
 - ・ 「調べる」手だてを広げることで、日常の中で漢字が使えるようにして行く。
- ・ 実施期間
平成25年より4月～継続中
- ・ 実施者
山川米子
- ・ 実施者と対象児の関係
学級担任

【活動内容と対象生徒の変化】

- ・ 対象の事前の状況

昨年度から活用のため、機器に対する抵抗感はない。学習場面での経験から「自分の助けになるもの」という意識を持っている。

中学三年生ということで、進路の選択に迫られており、「なんとなく」みんなが希望している学校への進学をイメージしている。担任から色々な情報を提供して、「比較して考えること」を提案しても、

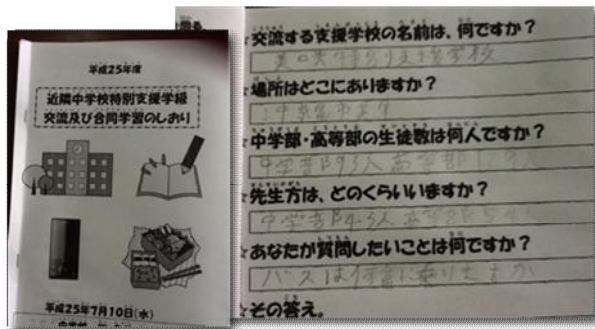
気乗りのしない様子が見られた。

授業場面でアプリを使った学習には意欲的に取り組むようになって来ていたが、授業外の場面では、方法として活用する姿はまだあまり見られなかった。

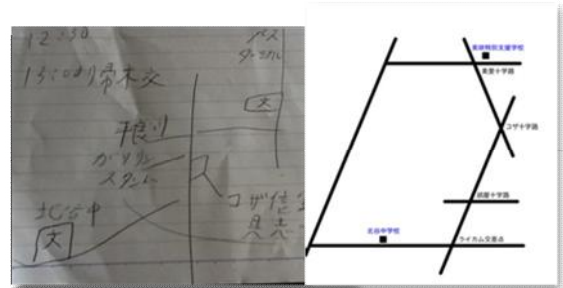
・活動の具体的内容と事後の変化

☆機器を使っての情報活用を目指して一支援学級の交流学习の際の取り組みを通じて

① 交流を行う前に、交流及び合同学習の日程や内容の確認、質問事項等しおりの記入を行った。その際、分からない漢字を「大辞林」で調べた。



② 交流する支援学校の所在地を Google マップで確認し、「簡略地図」を使って地図を作成。



② FaceTime を活用し、進路の選択先の1つである B 校の生徒会と進路学習を行った。



「自分の進路選択に関わる情報を自分で得る」という場面設定は、対象生徒にとって大きなモチベーションになった様子だった。担任からの情報提供をうけていた時には見られなかった意欲的な姿が見られた。

・しおりの作成の場面では

これまで、分からない漢字はひらがなで書いたり、教師や級友に聞いていたが、iPad を使って自ら調べたり級友に教えてあげていた。

地図を調べることが簡単にできることを知り、とても喜んでいて、目的地の地図を作成した後、自分の知っている場所の地図を調べる姿も見られた。「これがあればどこでも行けそうだ」という発言も聞かれた。

・FaceTime での交流場面では

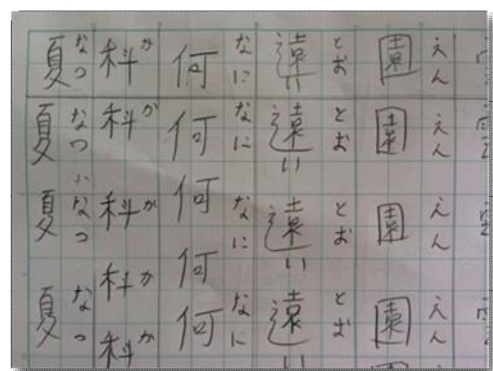
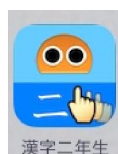
直接色々な質問ができたことで、今まで抱いていたものとは違う印象も得たようだった。それまでは希望の進学先を1校だけあげて、他の学校については特に興味を示さなかったが、「こんな学校なんだ」「ここではこんな勉強をしているんだ」ということを具体的に知ったことで、「自分がこの学校に進学

したら」というイメージを持って選択肢の1つとして考えることができるようになって行った。

「情報を得る」ことで、考える幅が広がって行くことを体感できたのではないかと感じている。

☆解決の手段を持つての漢字学習と、日常への学びの広がりを目指して

国語の授業の導入時間に、「小学生かんじ」（読みや書き取り問題に取り組める）、「漢字ドリル」（筆跡や結果が履歴として残る）、「漢字二年生」（筆順を覚えて対戦する）、「ピノバ国語」（答えが四択になっていて、読み書きだけではなく対語や部首、漢字の意味等幅広い）、「読み方フラッシュカード」（日常生活で使うような漢字がフラッシュカードで出てくる）等を漢字学習として5分程度活用させた。それぞれに特性があり、それらを交互に活用させることで生徒は飽きることも無く取り組んでいた。そうした取り組みを繰り返すうちに、躓いた漢字を家庭学習で取り組む姿が見られるようになった。→苦手なことを補うための努力と思われる。また、充実感があつたようで、それまでは催促されていた学習帳を自ら提出するようになった。



(生徒 A の家庭学習帳より)

日常的に「大辞林」を活用する場面を設定して行った。

しよりの作成場面でも触れたが、国語の学習以外でも、「書く」時にはいつでも使える状態にしていたことで、本児にとって「解決の見通しの持てる手だて」として「調べて書く」ことが定着して来ている。自分から「調べて書いていいですか?」と聞く場面も増えて来ている。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

① 様々な場面で、既習事項の iPad を活用する姿が見られるようになった。

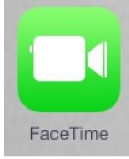
→分かる喜びを知ったことで、分からないことを放置せず調べるようになったと思われる。特に、書きたい漢字を「大辞林」で引く習慣が身に付いてきた。また、あまり聞き慣れない動植物や事象等については「Safari」でインターネット検索を試みたり、「Google マップ」を使って位置確認することが当たり前になってきた。そして、「簡易地図」を活用し、地図の書き方も身に付きつつある。

他にも、「KeyNote」を活用し、校外学習等の際の出来事や学習内容、感想や思い出等を綴ることができるようになり、その方法を後輩に教えてあげることもできるようになった。



② 中学校生活が残る僅かになったにも関わらず、制服や室内履きを新調した。

③④→FaceTime を活用した交流により、進学の可能性のある学校に関して自分の目で確認することができた。そしてそのことにより、対象生徒の中でその学校が否定的な思いから肯定的な思いへと変化し、選択肢が広がったことで、意欲が学習や容姿に現れたと思われる。



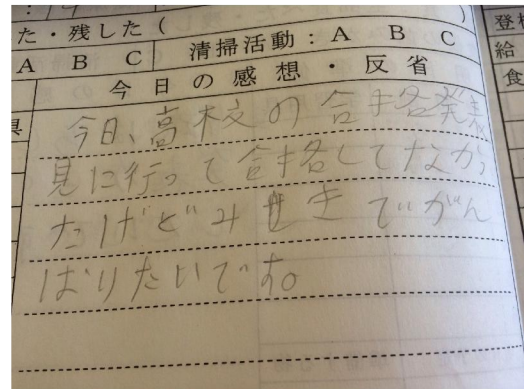
・その他エピソード

1月の最終報告会へ向かう前日に、Aの第一志望校とするA校の合格発表があった。ホームページでも確認できるのだが、例年の慣習で支援学級の後輩も一緒に高等特別支援学校へ向かったのだが、残念ながら掲示板に番号はなく、帰りの車中の静けさがAの気持ちを表していた。

学校に戻り、不合格の原因を話し合っているうちに、いつの間にかB校の話題になっていた。生徒たちの「どこにあるんですか」と言う問いかけに、慌てて黒板に地図を描いていると、Aから「iPad使ったらどうですか〜」という言葉が…。

受験に躓き落胆していたのは、生徒よりも私自身の方であったことを思い知らされた一瞬であった。

そしてそれは、Aがその日の日誌に書き記した内容にも現れている。文章の中には“悔しかった、残念だった”等という言葉は書かれていない。それどころか、“みさきでがんばりたいです”とあるのだ。普段、“体育の授業でゴールを決められなくて悔しかった”等ということはよく書くA。そのことから、その日の感想はAの素直な気持ちだと伺える。



その後は、B校について、ホームページを開き、授業（教育課程）や行事等の確認を行い、新たな目標に向けて頑張ることを誓うまでに至った。

